

## ハイネ管見

——その晩年より——

上原欣一

ハイネの“Geiständnisse”に次の様な言葉がみられる、「何たる不面目、私は私の凡ゆる学問知識を以てしても、殆んど文字すら解しないかの無知な黒奴（哀れなアンクル・トム）以上の境地には達し得なかつた」と。

このファウストにも似た嘆きの言葉を吾々は果していかに解したらよいものであろうか。詩人の單なる感傷であらうか。心弱き人間の老境に於ける悔恨の念でもあろうか。或は又ハイネお得意の偽装でもあろうか。

周知の如く、ハイネの所謂「神への復讐」が初めて自ら公言されたのは、五一年の九月の末に記された「ロマンツエーロー」の後書の中である。「七月革命の後で、ライン河の彼岸でも此岸でも、人々は（喜劇の）仮面をかなくなり棄てた。それ以來、殊にルイーフィッツの没落後というものは……ドイツに於ても、人々は宗教かそれとも哲学か、啓示信仰の教義かそれとも思惟の最後の結着か、絶対的なバイブルの神かそれとも無神論か、いずれかを選ばなければならぬ、という意見が頭を擡げてきたのである。…私はといえば……神学上では古い迷信たる人格神に復讐して了つた。」勿論こうした心境の變化はそれ以前、つまり、いわゆる「罍の墓穴」に横わらざるを得なくなつて、外界の事件よりは、むしろ内心の観照に耽るようになった大体四九年の春頃からと推定される。この後書以後もハイネ

はいろいろの機会に、大抵は旧著の新版の序言で、この自らの宗教的轉向を確認しており、いつもの單なる偽裝とは決して云えない。先に引いた、老の練言めいた言葉も、「自らの宗教的感情が再び喚びさまされたのは（直接には）パイブルに負うものであり、パイブルこそは私の救済の源泉であり、敬虔な讚美の対象となつた」と告白している直後につづくものであつて、過去の全生涯をふりかえつてみて、哲学の凡ゆる舞踏場裡を徘徊しつくし、精神の凡ゆる歓樂に身を任せ、飽くことなく凡ての可能な学説に挑戦した挙句の果に立つた點は、あのアンクル・トムと同じ聖書の立場に外ならず、この同信の黒人の傍らに、同じ敬神の念に充ちて膝まつく詩人の姿に、吾々は果して、老殘と變節の衰れた末路を見るべきであらうか、それとも又人間的な或は宗教的な共感を喚び起さるべきであらうか。

レーヴァルトやカーリツシュの伝える所によれば、当時二月革命前後の詩人は痙攣する病の床では刻々に自らの死を想い、戸外に轟く大砲の音には耳を劈かれ、こうした怖しい瞬間には「汎神論者の神は実は決して根本に於ては神ではないので、總じて汎神論者というものは本來事実に対してよりも、それが壁に投げる影、つまり名前に対して怖れをなす内氣な無神論者に過ぎない、ということをも認めざるを得ない」のであつて、結局一個の人格神というものを信ぜざるを得なかつた。然し彼の神への道はキリスト教会を経るものでも、ユダヤの会堂を通るものでもなかつた。エホヴァとの直接にして、眞劍な対話を通じて自身で神に導かれたものであつた。当然この宗教感の蘇生は純粹に宗教的なものであつて、一宗派一教会に捉われるものでは決してなかつた。だから既成宗教が彼にとつて價値のない點では生涯變りがなく、彼が教会を批判攻撃する妨げになる筈はなかつたのだ。只、自らも云う通り、一種の *courtisane*（エチケット）から宗教のユニフォームを着用することはあつても、そうした場合新教のユニフォームの方が旧教のそれよりも幾分煩わしくない、というだけだつた。但しこの教会攻撃にしても、晩年に至つて漸くあらわれだす疲労感に蔽ひ難いのであつて、精神のバステューともよばるべきベータール教会の巨大な大理石建築を前にして、さ

すが不屈の彼の精神もたじろがざるを得ない、いやたじろぐ先に、之に双向うことの無暴を覚る。元來が狂信とか頭冥とかいつたものとは無縁なハイネを、この點で彼の革命性の不徹底とか、無意識の懷古趣味の故に非難するのは勿論評者の自由であるが、それは又ハイネの歴史に対する深い洞察をも示している筈である。彼のこうした一種の諦念は一步進んでは教会の僧侶に対する切りの念の吐露される場合もないではない。「リベラリズムは曾て僧侶階級を不当に誹謗した。恐らく今では、もしその不肖の一員が過ちを犯しても——結局そうした過誤は人間性、或はむしろ非人間性に帰せらるべきものだから——もつと寛大な切りを與えてやることもできよう」と「回想録」の中で書いてある位である。彼が、曾て幼年時代にジェズイット派の学園で、就中シャルマイヤー師の講義に列席したことが、ヨザファットの谷の審判席の前に出た場合に、彼の過去の瀆神的な言行にも情狀酌量の余地を残すであろうことを期待するのは強ち彼の戲談とばかりは云い切れないものがある。どんな真剣な主張をするときでも、どんな鋭い攻撃もどんなに強い僧惡の念をも直接な表現にもることなく、何らかの比喩と諧謔の衣裳を纏わせざるを得なかつた彼の性格に、寛大なフマニテートとフォームルをのみ見ようとするのは眞眞のひき倒しであろう。そこに彼の性格の分裂性と弱さをもみたとしても、彼の健全な諷刺精神に何程の瑕がつくとも思われぬ。而も、自らのフォームルも、天のプリストフアネスたる万有の創造者のそれ比べれば、いかにみすばらしいお喋りに過ぎなかつたか、と嘆くハイネの胸を今更の様に重く壓するものは、曾て神を嘲つた悔恨の念でもあろうか。こうして、苦惱する病を靜かに見下す創造主の大きなフォームルを讚美して、頭を垂れる下からして既に彼の反抗の精神が首を擡げる。神の最高の創造力がなくて、彼の精神内にはあの永遠の理性が輝いている。「私は神の戲談をもこの私の理性の法廷に引き出して、嚴たる批判に従わせることができる」と自らの弱腰に鞭打つかの如き昂然たる言がなされるのである。

ハイネの精神分裂的な傾向を云々する批評家は勿論尠くないであらう。只そうした人々の評も概ね表面的に留つて、この傾向を近代詩人としてのハイネの重要な因子と見做す者は余りいない。分裂的症狀は苦惱する近代的自我にとつて宿命的なものであるとはいへ、ブランドスの云う如く、その血流の中に在る様々な特性が、近代文明の衝擊の下に火打石の如く火花を散らすその一瞬々々をあらわしているハイネには、特にこの傾向は顯著で重要であると云える。コスモポリタンとしてはゲルマン的感傷の浪漫性と、フランスのエスプリと、ユダヤ的な内攻性、熱狂、沈潜、憂愁、巫戯化氣分等を一つの形式というよりは、むしろ一つの坩堝の中に投じ入れて、中味が渾然たる一体を成す代りに、そのめいめいが時々刻々、或は交替に、或は同時にその權利を主張する。こうしだ状態で、而も周圍の世界そのものが真中から二つに裂けているとき、その世界の中心をなすべきヘルツが裂けないで完全だ、といつて自慢するのは確かに自らの散文的な心情を白狀するに過ぎないであらう。

若し極端な云い方が許されるなら、ハイネの作品の殆ど全ては彼の主觀の表白であり、一種の告白であり、その告白が又殆んど比喩と反語と諧謔と諷刺によつて色づけられている。何事によらず融通の利かない狂信性を嫌つた詩人は何らかの主義とか節操に縛られるには、余りに彼の性格は複雑だつた。従つて彼の主觀の表白される凡ゆる箇所に詩人の眞の意図と告白を識別するのは容易な技ではない。或る時は老年の懐旧に溺れるかと思えば、或る時は革命に青春の新たな感激を蘇らせ、或は宗教、殊にカトリック教に対して妥協的な氣持を示すかと思れば、すぐその口の裏から、今云つた心の弱さを叱責する様に、昂然と自らの詩人的才能に最後の信をつなごうとする。「私は性來野心家ではないけれども、若し法王選舉會議が指示するならば、私は安んじてベテロの椅子に坐したことであらう」という言葉を裏返す様にすぐ次のことばがつゞく、「私は勿論法王にも大僧正にもなれなかつた……人は詩人であれば充分

だ、況んやこの諸他の國民に冠絶する独乙國民の中でも偉大な抒情詩人であるにおいてをや。」この軒昂たる意氣は三轉して沈鬱に陥る。現実の詩人は祖國を離れたバリのむさくるしい一アパルトマンの重い病床に、老殘の身を横える以外に由なき廢人なのだ。曾てはアナナスの如く甘美なお世辞とみえた榮譽も、苦菜のように彼に嘔吐を催させるようになつて既に久しく、シーラスの薔薇はいかに香わしくとも、病室の鬱した孤独の中にかくを得るものとは、温められたナブキンの匂い以外に何があつたであらうか。

ハイネの「回想録」の末尾には、ある死刑執行人の娘に対する少年時代の恋心を描写した次の様な記述がある。「私が彼女に接吻したのは、單に優しい愛情からばかりではなく、彼女の屬する古い社会と、その社会の凡ゆる陰鬱な偏見に対する嘲弄からでもあつた。そしてこの接吻の瞬間、私の中に、あの私の後年の生涯が捧げられる二つのパッションの最初の炎が燃え上つた、美しき婦人に対する愛と、フランス革命に対する愛とが。」この回想の言葉に見られるように、確にハイネは、言葉を集約して云うならば、愛と革命の詩人だつた。だがこの規定にもやはり註釋が必要なのであつて、「婦人に対する愛」といつた場合の婦人は凡ゆる藝術の象徴としての美、その美を代表しているものであつて、そしてその美は又新しき時代の藝術を豫見しながらも、古きものへのひそかなあこがれの故に浪漫的なもので留まらざるを得なかつた美であり、革命も権力者、支配層への絶えざる憎惡輕蔑と、民衆への眞実の、然し余裕ある、躊躇いがちな愛情から発したものであつて、社会的な、或は多面的な顧慮は余り拂われていない。革命を叫ぶ聲にも詩とひやかし氣味の比喩を織りこむことを忘れない詩人の態度は当然いろいろの疑惑臆測をひき起さずにはおかない。悪く考えれば、表裏全く逆に、いずれとも受けとれる態度はハイネの保身術の一種、他をも自らをも惑わすミステイフィカションでもあらうか。

「私は自分の言つたことの眞実性には責任をもつが、その表現方法の責任をもとうとは思わない。言葉のみに捉われる人は私の通信文の中に、故意に探し廻せば結構多くの矛盾や不注意や、のみならず又正当な信念に欠けているかに思われる点を拾い出すのは容易だ。然し私の言葉の精神を理解する人は恐らく、到る所に思想の嚴たる統一、ヒューマンテイの問題に對する不變の愛著、革命の民主的理念に對する渝らざる帰依を認めるであらう。」此の、直接にはフランスの讀者に喚びかけてはいるが、勿論ドイツの讀者をも意識した「ルテウィア」への序言中の言葉には、ハイネの眞意を理解しない俗物への輕蔑と、理解しようと欲しないハイネの反對者達への強い不滿がこめられている。人は屢々ハイネの思想の小舟に掲げられた吹き流しの標識をハイネ自身の社会的、政治的意見の眞の表現だと間違えた。加うるにジャーナリズムの暴力はこの小舟のマスにはためく布片などに意を拂おうとはしなかつた。詩人は勿論自分の文章を在りの儘の姿で受けとつて貰いたかつた。アクセントの置き所、諷刺の目標、イロニーの眞意を解する讀者を期待したであらう。然し誤解と暴力と無理解の波に揉まれつゞけるこの小舟は、せめてその積荷を一般讀者という港に運びこまれることをのみ念じた。そして、この企てが成功する爲には種々の手段が弄されねばならない。就中、当時ドイツの当局から危険視されていたハイネ自身の思想と主觀の表白は事實、という衣をまとわねばならなかつた。この意圖を實行する爲には、ハイネは自分の意見を表すに他人の口を藉りすることも躊躇しない。そしてその最も有利な効果は自己の態度の傍觀者的な無關心を人に印象づける点に在つた。

かゝる責任回避的な自己自衛を詩人に余儀なくさせたものは、根本的には當時の慘めなドイツの封建的な後進性にあつたといえる。オーストリア、プロイセンをはじめとするドイツ國內の反動政府は陰に陽に詩人の前途を阻み、檢閲の手をかりて自由な言論を彈壓する。三五年の聯邦議會に至つて、ハイネは青年ドイツ派の代表的な作家と見做されて、未來にも亘るその著作を禁止される。こうした壓迫の網の目をのがれてまでも、ドイツの封建性を批判し、ド

イツの読者の蒙を啓こうという意欲は、彼のジャーナリスティックな氣象及び詩人的才能と相俟つて、凡ゆる反聞苦肉の術策を、時には政府への追従、時には友人や読者への裏切りとも思える言辭を示す。「僕とドイツ当局との關係は日増しに和解へと進んでいる……僕の努力は政治的に革命的なものではなく、より多く哲學的なものなんだ」と妥協的な態度を友人に洩したり、「ルツカの町」の中で、「仮に王達が愚かで民衆の精神に逆ろうようなことがあつても、私の信念は君主的原理を支持する」と言つてみたり、或は又「フランスの状態」の末尾で、三二年六月、巴里のサン・メリーの僧院で挫折した共和主義的な人々の自然発生的な暴動を、熱意ある共感を以て記述しているが、之を結ぶ言葉がこうである、「……彼等（この僧院で覺れている人々）は皆一人のこらず若年の共和主義者だつた。この館では私だけが唯一人の王党派だつた」。このような言葉を吾々は文字通りに解してよいものであろうか。イルベルクは「彼は特権階級には反対だつたが、共和主義を奉じはしなかつた、むしろ、立憲王制に賛成だつた」と片付けているが、ハイネ自身自らの胸に、お前は一体どちらをえらぶのだ、と卒直に訊ねた場合、彼は、自分は王制を支持する王党だ、とは勿論答えまい。さりとて、自分は共和主義者だ、とはつきり云い切れたであらうか。眞実の所は、彼はそうした二者択一の問題を自らに課することを極力避けたのではあるまいか。他から無理強いに迫られでもすれば、「私は詩人以外の何者にもなろうとは欲しなかつた」とでも逃げをうつたに違いない。それは、当時ルイーフェリップ王治下のフランスに住し、プロシヤ王制下の厳しい検閲をくゞつて、「ドイツ詩人」としての名譽を保たねばならなかつたハイネの苦しくも本意なき、而もいくばくのイロニーを潜めることを忘れない告白であつたであらう。

「君主政体か、共和政体か、或は、貴族制度か、民主制度か、という問題は、生活の第一原理、即ち生活そのものの理念獲得の爲の闘争が未だ決着しない限り、第二義的意味しかもたない」とラウベ宛の書翰の中で云う時、ハイネ

は政治の力を見縊りすぎている、というより、生活権獲得の爲の鬭争そのものが本来外ならぬ政治に向けられねばならぬこと、統治形態の如何によつて、所謂生活そのものの理念が大きく左右されることをハイネは忘れてゐる。十九世紀という近代は、政治と生活とが別個に並存出来る世の中ではもはやなかつた。この二つの問題を分離することによつて檢閲の目を潜る意図は当然あつたであらうけれども、このハイネの言は、自ら知らずして、彼の政治觀の眞意を洩したものだと言へる。勿論彼はドイツの封建的な絶対主義に対しては、生涯渝ることなく戦いつゞけた。プチアル的な凡俗の自由主義者達を反語的に嘲笑しながらも、この自由こそは、彼の凡ゆる面から拘束を迫られた意志にとつて、眞の望みであつた筈である。然し、この封建制から解放さるべき自由が、実は政治形態にこそ最も左右されることを、彼は自らに納得させようとはしなかつたのではなからうか。七月王政に対して時折示される彼の讃辭も、ルカーチの云う如く、凡て見え透いた反語ばかりでもなかつたであらう。いずれにも轉び得る韜晦的な保身の手段をそこに見るとしたら、詩人に対して余りに苛酷な評となるであらうか。

一般に物事の観念的な理由を執らないルカーチは、ハイネの孤独の原因を彼の超党派性に歸せしめて、極めて明快に論断を下している、「ベルネはドイツの急進的なプチ・ブル主義の運動と、マルクスはドイツ・プロレタリアの運動と、それぞれ密接に結びつき、兩人共にめい／＼の爲方で、一階級の生活と發展を共に体験した。だがハイネはドイツのいかなる階級、いかなる党派とも結びついてはいなかつた。……ハイネは生涯ブルジョワ民主主義とプロレタリア民主主義との間を動搖する立場に留つた」と。然し、ハイネの孤独は、その階級的な立場からだけでは説明し難いものを含んでゐる。勿論彼は所謂進歩と反動の両陣営から攻撃を受けねばならなかつた。だがそのいずれにも心を許して属することのできなかつた所以には、やはり彼のユダヤ的な、従つて又コスモポリティッシュではあるが、當時としては呪われた性格が挙げられると思われれる。



彼ハイネには、眞に心を許した友人は生涯得られなかつた。眞実に恋心を感じた、と考えられる、アマリーエとレーゼの二人の姉妹への愛情も、その間の消息を伝えるべき資料が、初期の抒情詩の若干を除けば、殆んど消滅している現在、どの程度のものだつたか知る由もないが、恐らく詩人の出生の疑わしき汚点の故に一方的なものに終らざるを得なかつた。大学卒業と同時に手にした、ヨーロッパ文化への入場券ともなる筈の受洗証書もミュンヘンの大学ではその効力を認められない。いかに詩人の無拘束な天才性を強調しようとも、刻印を捺されたユダヤ人ハイネが、ヨーロッパ文化の享受と、それへの寄與を全うする爲に常に、安定せるビュルガーリツヒな地位を願望しつゞけた、という事実は否定することも出来ないし、又否定する必要もないことだつた。彼がこうした願望を常に懷き、屈辱的とも思われる叔父ザロモンからの年金を甘んじて受け、又賣國奴の嫌疑を買つてまでも、フランス政府から金銭の補助をうけていたとしても、それが果して、ユダヤ人ハイネの、いや人間ハイネの生涯の歴史に汚点として残るべきものであろうか。シェイクスピアのシャイロックに既に、喜劇的な要素ではなくして、被壓迫者としてのユダヤ人の悲劇をみていたハイネが、自らも一人のユダヤ人として、本能的に護身の術に長けていたのは偶然ではなかつた。こうした一種のコムプレックスともいふべき觀念に憑きまといわれながらも、自らの詩人的才能に恃む所の多かつたハイネは、前者の觀念を無意識の裡に抑壓することによつて、彼の錯綜せる性格を作りあげてゆく。

「私は何よりも常にデイヒターであつた」と「Geistliche」の中で云うハイネは、若年の手紙では、「詩人なんて僕の小さな一部分に過ぎない」とか、「文学は結局一つの美しい余事以外の何物でもない」とか、或は又、「ジェノアへの旅」では、自らを人類解放の一大戦争に臨んだ勇敢な一兵士に擬して、「文学は、私がそれをどれ程愛していたにもせよ、常に私には單に聖なる玩具か、天國めあての神聖な手段でしかなかつた」と云い切つた同じハイネだつた。革命的な青年の客氣に溢れた後者の言葉が当時のハイネの眞実の聲であるなら、過ぎ來し方をふりかえつての

前者の告白も、又劣らず詩人の本音だつた。

詩人であること——それは詩人ハイネに、いかにしても拒絶することのできない最後の権利であろうか。批判的な観察者として、ドイツ観念論の哲学に革命的な意義を認め、歴史の必然を深く洞察していたハイネが、既に五〇年代にして、「未來はコミュニストのものだ」と断言せざるを得ない時でも、尙「藝術家のひそかな不安」が詩人を悩ます。

新しい民衆の藝術、という自覚以前、ハイネ以上に、文学と政治、或は藝術と社会との相剋に悩んだ詩人はいなかつた。「大乗的な思想の潮流に身を委ねるならば、吾々とても藝術や学問の利害を、いや吾々の凡ゆる個々の利害をも、壓制に苦しむ民衆の總体的利害の爲には進んで犠牲にして悔いまいであらう」という言葉が政治家ハイネ、若くは現実の批判的な観察者ハイネのいつわらぬ告白であつたとすれば、「現代の全文明、數世紀に亘る努力の成果、先達の貴い営みの全成果が、來るべきコミュニズムの勝利によつて嚇されるのを見た」のも外ならぬハイネであつた。ゾンテンの云う「詩人」と「政治家」という二つの要素の対極性はハイネの対コミュニズムの態度に最も顯著にあらわれる。ゲート時代の克服という問題を自らに課し、そして「浪漫派の最後の自由な森の歌」を「アッタ・トル」で既に歌い了えてしまつた筈のハイネも、この点だけからするならば矢張り、過去の伝統に根ざした十九世紀の詩人に止まつた、と云うの外はない。「古きローマン主義の世界と共に滅びゆくであろう私の詩句が、勝ち誇るプロレタリアートに脅かされて、廢墟と化するかと思えば、云い難き悲傷に胸が咬まれる」のだつた。

然し、ハイネが昔のローマン的な藝術に、いかに絶ち難い愛著の情を感じていたにしても、この藝術のみが全てであると思つていたわけでは勿論ない。未來に於けるプロレタリアの勝利を、「極度の憂慮と息苦しさ」を伴いながら

も豫見していたハイネに、このプロレタリアがもつべき新しい藝術が豫見できない筈はなかつた。「ルテーツィア」への序言は更につづいてゐる。「さりながら、新しい時代は新しい力を生むであろう。それは新しい時代そのものと熱烈に共鳴し、もはや色褪せた過去から自己の象徴を借りる必要もなく、在來のものとは異つた新しい技法を生み出すに違ひない。それまでは、自己陶醉の主観、奔放な個性、自由なる人格、何にまれ、凡ての生の悦びを以て、色と音とで、思うまゝに振舞うがよい。それでも古い藝術の死んだ幻よりはとにかく、効能があらうというものだ……現在の藝術は滅びゆかねばならない、その原理は、未だ生き永らえているアンシャン・レジームに、過去の神聖ローマ帝國に根ざしてゐるから。過去の打ち萎れた藝術と現代との矛盾は藝術にとつて有害である。逆に、時代の動きこそが藝術にとつて爲になる」。

これ程確かな洞察をなしているハイネも、現実にプロレタリアが勝利を得た曉に、その新しき藝術に自ら進んで参劃することを躊躇しなかつたであろうか。恐らくその答は否定的であろう。

Traum der Sommernacht! Phantastisch

Zwecklos ist mein Lied. Ja, zwecklos

Wie die Liebe, wie das Leben,

Wie der Schöpfer samt der Schöpfung!

所詮は、彼の詩も夏の夜の夢の夢にすぎなかつたのであろうか。

「民衆の爲には身を犠牲にしても厭わず、民衆の解放こそが、詩人に課せられた大使命であつたことを自覚しながらも、潔白な詩人の感じ易い性情は、現実の民衆と個人的に接觸することには、いかなる場合にも怖氣をふるう。更にこの民衆に愛撫される、と考へただけでも慄然となる。」こうした、民衆に対する侮蔑の言を吐いて、精神の貴族性

をつゝみかくすことのない詩人は、実際の詩作に於て、いかに民衆の側に立つての、或は壓制者に反対する眞実の詩を書いていようと、結局眞の民衆詩人ではあり得なかつたであろう。晩年に數多い時事詩、譬えば「慈善家」「ルムベン根性」「奴隸船」「コーベス一世」、さてはシュレージエンの暴動に刺戟されてできた憎惡の詩「織工」等にしても、詩そのものとしては、当時の何人にも豫期し得ない、鋭い社会諷刺を文学形式に盛つたものではあつたが、それらの諷刺も現実のハイネ自身の精神と、どれほどのつながりがあつたであろうか。言葉が思想の先走りをする前に、思想そのものがハイネの眞実の心から遊離し、飛躍している嫌いが無いでもない。こうした先走りの危険がわずかに救われているのは、肯綮を得た社会批判と、ハイネの文学的才能によるものである。だから、壓制者に対する辛辣な揶揄と諷刺の詩は書かれても、それは抑壓される者の側に立つての、若くはそれに共感を感じての詩というには些か遠かつた。諷刺と攻撃そのものが目的であるならば、民衆の啓蒙が意図されていたにしても、この抑壓される民衆の側に立つ必然性は勿論無い。しかしそれにしても、政治家としては、或は現実の批判者としては、当然民衆の側に立ちながら、詩人として、或はむしろ過去の詩人としては、その同じ民衆に侮蔑的態度をとるとするのは、自身内部にある二つの要素の苦悶に充ちた相剋として、ハイネ自身には許されても、やはり後の世の批判を免れることはできない。またコミニズムが彼の心に抑え難い魅力を持つてゐるのは、抑壓される民衆に対する同情の外にもなお強く、「惡魔は理窟屋だ」というダンテの言の如く、「人間は凡て食べる權利をもつ」という前提が反証されない限り、この前提の凡ゆる結論には従わざるを得ない」という怖ろしい論理の聲のためであり、更には又、彼がコミニスト達に「ほとんど愛情を感じるほどになる」というのも、当時「偏狭なナショナリズムに対する憎惡」の反動でもあつた。

それに、ハイネの嘲笑が向けられる凡ゆる対象は、ハイネにとつては、その対象そのものが諷刺の目標になるとい

より、むしろ、その対象に見出される俗物性の場合が屢々である。詩を書く時のハイネはやはり詩人であり、詩人ハイネにとつて最も我慢のならなかつたものはやはりこの俗物性であつたに違いない。自分の才能に恃む所が多かつたハイネは、相手と同等の立場にたつた正攻法をとるよりは、当然自らの高みから諷刺の矢を放つ方を選んだものと考へられる。従つて自身はそれ程の反感も侮蔑も抱いていない対象に対しても、むしろ、過去の人間、過去の詩人ハイネにとつて、ひそかな同情もないような対象に対してすら、一度彼のペンが走る時、辛辣極まる諷刺詩が作られねばならなかつた。それに、バルザックみたいに、人間には、自分の信奉し、或は同情するものを、時に揶揄し批判してみたくなる傾向がある、とすれば……。人間ハイネを斯うした色眼鏡を通してのみ観るのは勿論不当ではあるが、やはりこうした一種のコムブレックスは、ハイネの場合にも、一つの観點となり得るであらう。（この観點に立つての詳細は別に譲る。）

本稿は、五四年十月、仙台に於て「ハイネの告白」と題して発表せるものに若干筆を加えたものである。